
双緋の悪鬼祓い

南方陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

双緋の悪鬼抜い

【Nコード】

N8655R

【作者名】

南方陽

【あらすじ】

それまではなんてことない日常だった。クレー射撃という少し変わった趣味を持っている自分は、射撃場からの帰り道に『悪禍』わざわいに遭遇してしまう。怪奇が偶発する現代に於いて、それは言ってしまうと普遍的な事だった。その現象に自らの死を直感した、正にその刹那——ある美麗なお姉さんによってその危機から助けられる。その両手には白と黒を司った禍々しき剣。そんな双剣に見蕩れていると、自分は内より迸る“何か”を感じて——

悪鬼抜いの奮迅記録、番外編。要純一かなめじゅんいちを主とした和風ファンタジ

ーものです。別にそっちを読んでいなくても楽しめる仕様になっていますので、気兼ねなく覗いて頂けると幸いです！

第1話 内なるもの

風が心地良かった。寒さが身に沁み入るの感じながら、自身を吹き抜けるそれを無視して目の前の競技に集中する。

スコップは無いにしろ、飛び出そうとする皿を銃の少し上——機関部に目を近付け、照準を合わせた。

自分の立っている射台から十五メートル先には、そのクレーを飛び出させるための射出口が、傾くのが早くなった夕暮れに照らされ目映ゆかしく輝いている。

一秒一秒が過ぎ去るの、心音と共に自分の脳内で確認していく。幾分と緊張するこの刹那。瞬きする時間さえ遅く感じる、この不可解な心地。

——そんな心境を晴らすようにして、鈍い射出音と共に朱色があったクレーが空へと舞い上がる。

出てきた方向は自分の正面では無く、斜め右前方という少し難しい位置。

即座に銃身を虚空に融け込む皿へと向ける。ゆっくりとは言え、見当違いな方向へ移動するのを当てると言う難しさは、初心者でもすぐに分かるだろう。

肩を入れ込み、反動によってブレない様に銃と腕を固定する。続けて銃身の先端に立つ照星でクレーの一秒先の動きを捉える。

そして——細かくも威力のある幾重の弾を迸らせた。

予想していた着弾予測点よりは少し上に向いてしまっていたものの、散弾というクレー射撃に於いて普通の弾を使っていたことによ

り、朱色の円盤は弾けるようにして空中を撥ねる。

もう一発と思って弾をし込めていたが、その必要は無かったようだ。見事に破壊され、勢いを失うと共に地表へと粉々になって着地。

(……今日はこのぐらいにしとくか)

先月から来ていなかったためか、今日は幾分より増してのめり込んでいたようだ。まさか朝から夕暮れまで、ぶっ続けてやるとは自身でさえ思いもしなかった。

慣れた手つきでイヤープロテクターとゴーグルを外す。いそいそと持ち慣れたトランクケースの中に、最近やっと親しみ持ち出した散弾銃を仕舞った。

「ありがとうございますー！」

随分と顔馴染んだ女の子の店員さんに手を振り、枯れた外気を胸いっぱい吸った。

毎度ながら、射撃を終えた後のこの虚脱感が堪らない。

高校一年生である自分がクレー射撃に嵌っている、なんてクラスのみんなが知ったら、いったいどんな顔をするだろうか。特に——親友である恭さんの驚くような顔が目裏に浮かぶ。

自分がこの競技に興味を持ちだしたのは、父さんと中学の時、観光で行った韓国で射撃をしたのが原因だ。

元々自分の父さんも射撃が好きで、その時初めて自分を連れて行ってもらったのだが……。

あの初めて銃を撃った時の解放感、そして体に響く痺れ、といったものが何とも言えない大きな好印象を齎した。もたら

日本に戻ってから警察署に行き、講習を受けたり教習を受けたりと面倒な手続きを行い、何とか高校に入る前までに銃の所持と火薬譲渡のライセンスを取得することに成功。

費用は莫大——とまではいかないが、結構掛かったもんだ。軽く十万は超えていると思う。お年玉を溜めていなければどうなっていたか、想像もつかない。

自分の街から三つも離れた駅に向かって、俺は少し小走りに移動する。

熱中し過ぎたせいで、電車の時間を忘れていた。乗り遅れば三十分程待つ羽目になるだろう。

ふと目移りした少し大きな公園。遊具など一切無いここを通れば、駅までのショートカットになることを自分は知っていた。

少しだけ通り過ぎた道のりを引き返し、公園に侵入——
した所で、“何とも言えない畏れ”を、決して普段は敏感でない肌で感じた。

「……っは？…何だ、コレ」

意味が分からなくなる。とりあえず、体が自分の意思も介さずして震えだす。

何かが来る。そんな複雑怪奇な気持を持ちだした——刹那。

目の前の空間が、“ぐにやり”とねじ曲がる。その中心は随分と暗く、そしてこちらを飲み込もうかとするような雰囲気醸し出す。

そのまま——彼奴は現れる。

「……シュウウウ」

この時やつと分かった。今さっき起こった空間のねじれは『悪禍』わざわいで、自分の眼前にそそり立っているのは『悪鬼』なのだ。

妖気が一点に集まることで妖呪的作用が生じ、こういった怪奇が偶発する現象は、昔からこの世界で当たり前前になっていた。

しかし初めてそれに出会ってしまった俺は——どうすることも出来ない。

こういう怪奇は“専門的に被う力”を持っていないと、立ち向かう術が無いのだ。

この世界の常識が通じない——それが奴ら『悪鬼』なのである。

その幾分と長く鋭い爪を生やした、まるで狸のような悪鬼は——無機質な顔を浮かべたまま自分に対して腕を振りかかってきた。

咄嗟にして肩に掛けていたトランクケースを盾にして、身を守る。ガラツと音がしたかと思うと、その黒いトランクケースは中心を綺麗さっぱりに両断されていた。……“大半を鉄によって作られているライフル”ごと。

「つちよ！ ふざけんなっ！ 中古でも高かったんだからな！」

そう言っただけは怒り狂うが、あつちの悪鬼はお構いなしだ。

随時切り刻もうと、俺に対して距離を詰めていく。……この状況、凡人である自分にどうしろと？

「うひゃっ!？」

そんな風に思っていると、自分の顔を鉤爪が掠った。ただそれだけなのに、勢い良く頬からは血が滴り落ちる。

よるめいた自分の体を、今度飛びついてきて馬乗り状態になる悪鬼。

「つつ！——って、……嘘だよね。こんなの」

まさかこんな何気もない日常で、しかも射撃場帰りのウキウキ気分から一転して絶望にさせられて死ぬのか？自分は。

そんな考えも虚しく、大きな狸は爪を振り上げて俺の顔面へと——

「ツギヤウ……！！！」

……。

……………。

……あれ？何も起きないぞ。あっさりと頭でも挟まれてご臨終だ
と思っていたのだが。

目を開けてその光景を目の当たりにする。俺に馬乗りになっていた悪鬼は、公園の中心近くまで吹き飛ばされていた。顔から自身を構成する妖気が少しずつ溢れ出ており、甚く苦し^{いた}そうである。

「だいじょーぶかな？」

呆然と見ていた俺の後ろから、大層可愛らしい声が響く。

声の赴くままに振り返ってみると、そこに少女——いや、よく見るとお姉さんが立っていた。

髪は腰ぐらいまで伸びており、煌びやかな少し赤みがかった茶色をしている。絹を想像させるそれは、沈みかけた夕暮れと深く合わさっている。

顔は小柄。決して大きくはない身長。しかし何気ないそんな特徴が、その人の美貌を際立たせているようにも思えた。

そんな姿とは相対的に——二対の刀身が、輝かしくも兇刃さを周囲に放っている。

黒と白に彩られているその双剣は、形としては鉞に近い。無骨に曲がっており、それでいて先端の鋭利さは他を圧倒するかの如く鋭

かった。

……そんな武器を見ていると、自分は何故か体に“力が溜まるよ
うな”、そんな奇怪な症状を感じてきた。

「人払い、やってたと思つてただけだね……。……そのカッコい
い子、ちよつと後ろに下がっていて」

そう言つて彼女は悪鬼の方へ、堂々として足を運んでいく。

その姿はどう考えても非現実的。だがそれ以上にその立ち振る舞
いは美しく、目を見張らされるものだった。

（ああ、あれが……『悪鬼被い』か）

国から認定され、悪鬼を屠るために面目躍如する人々——それが
悪鬼被い。

国家公務員扱いとなる彼らは街ごとに仕事の範囲を持ち、不定期
に出現する悪鬼に対処する。

そう考えると、今戦闘を始めようとしているお姉さんはこの街の
悪鬼被い——という認識で間違いないだろう。

「さあ……踊りなさい」

虚空にそつと囁いたかと思うと、彼女は猛然として地面を蹴り上
げる。一瞬で間合いを詰め、喉元に右手を一閃。

続けざまに左手の剣を斬り上げたかと思うと、右手が上から舞い
戻る。躍動するように両手が高速に、それでいて的確に悪鬼を抉つ
ていく。

「ア……アガッア……!!」

突然の事で悪鬼は戸惑っている。

つい先ほどまで優位であつた自分が、何故こんなにも窮地に立た
されているのだろうか。そんな気持ちが俺の目でさえ確認出来るほ

ど、その顔は酷く堅い。

「っし！」

右手に持つ剣の柄で叩いたかと思うと、クルツと体を反転させる。その遠心力を保ったまま、途轍もない速度で悪鬼の中心に、後ろ蹴りが炸裂。

その蹴った左足は燐光によって輝きを放っている。……多分、誰にでもあると言われている八百万の神々の加護——神力を纏ったのだと思われる。

しかしあんな使い方は見たことなかった。たまに悪鬼を抜く所をテレビ中継されることがあるのだが、大抵は『神魃^{しんぱつ}』と言われる武器を出すための力として使っただけだ。

体に神力を纏い、それを直接悪鬼に叩き込む等まともな人が考える事ではない。

……まただ。今度はあの燐光を見たときから“力が迸っている”。体中を駆け巡る様なその力は、前から在ったものの様にも思えるし、はたまた突然出てきたようにも感じ取れる。

そんな現象を現在目の当たりにしている俺の前では、お姉さんが怒涛の勢いで一撃を加え続けていた。

蹴る瞬間、斬る瞬間に必要な神力を少量纏う。その技術はどうか考えても、他の悪鬼被いから見ても異例のように思える。

「っもう。いちいち再生しちゃって！」

そう言ってお姉さんは上から両手を、勢い良く振り下げた。狸の体は見事に三等分され、その間からはドス黒い妖力が溢れては消えていっている。

——だがそんな風に確認出来たのも束の間だった。その狸はまず

溢れる妖気を抑えたかと思うと、“2等分に体を切り分けた”。

「ええ！？　嘘、こんなに高位な悪鬼だとは思わなかったわよ！」

そう言っただけは二体が振るって来た爪を双刃で上手に弾く。

すると分裂した小さな狸の方が、ピタッと攻撃を止める。――そ

して何を思っただか、“俺の方に向かって来た”ではないか……。

「あっ！　ちよつとそれはダメ！」

そう言っただけは輝かんばかりに双剣に神力を施す。

「っは！」

それを体全体でかき回す様にして――振り上げた、正にその刹那。

彼女の周囲三メートル辺りに神力の檻が形成される。その檻に囲まれた大きい方の狸は、再生しようとも再生出来ない程に神力によつて浄化され、現世から暗い粉塵を放って消えた。微かな断末魔が虚空に溶けていくのが分かる。

小さな狸の方も多少その檻に被っていた。しかし即座にその体は諦めたように切り離し、より小さくなって俺の元へと突き進んでくる。

――右手をえらく鋭い鉤爪に変えて。

「やばいわ！　その子、逃げて！」

そう言っただけは彼女はこちらに走り寄ってくる。だがそうこうしている内に悪鬼は俺に照準を定め、腕とは名ばかりの爪を高々と振り上げ駆けてくる。

「……はあ、とことんツイて無いな。俺、まだ死にたくないんだけどね」

そう思えば思うほど、体を駆け巡る力の濃度が高まり、今一度大

きく感じるようになる。

まるで“使え”と言わんばかりに。

「ま、それなら死なない程度にやりますかな」と

そう言う俺は、体中の不可解な力に手を添える。進む熱いその力を両手へと慣れない様にして集める

インフット……使い方は分からないのに、何故か使う事が出来る。予め脳に内臓させられているようなその力を、俺は抄出させようとする。

「喧嘩売りやがった……お返しだよ」

そう言うて掌に力を進らせた。その瞬間から自分の体はその力によつて輝きだす。

自身の掌中心に、強大な神力が集った事を悟った。灼け抜かれそうな力の印が、具現し終えたかと思うと――

俺の両手には二対の拳銃が投影されていた。

右手の方は至つて銃身の長い美しいフォルム。左手の方は引金と銃身が二つ対となっており、大層禍々しいフォルムだ。

そんな初めて見た拳銃に、自分は何故か安堵の気持ちを持っていた。もしかすると、このように具現する前から自身に眠っていたのかも知れない。そんな意味の分からない気持ちに俺は僅かの間、浸る。

無意識の内に神力を右手に溜めこむ。誰にも教わっていないのに、どのくらい神力を混ぜ込むと銃弾を射出することが出来るか分かる。爪はもう三メートルぐらいにまで詰め寄つて来ていた。

――逆に言えば、それだけの近いと言う事だが。

あくどい顔を浮かべるのを自分で確認しながら、右手からマズルフラッシュ発射光を迸らせる。狙うは爪を形成している腕の根元だ。

日頃十五メートル離れた、どのように動き始めるか分からないクレーを弾き飛ばしているのだ。三メートル、しかも直線状にこちらに寄ってきている的など、外すという概念はまず無くなる。

その考えは正に的中した。爪は根元がポツクリと折れ、そこから少量の暗いオーラが溢れ出る。

その隙に自分は、陰ながら神力を溜めていた左手を狸へ向ける。狙うはお腹の中心、そのために狙いを一点に収斂しゅうれんさせる。

そこから轟音が劈つんざくばかりに響く。死を連想させるような光の結晶は、無慈悲にも狸の中心部へと決り込んだかと思うと――

大気を弾き飛ばさんばかりに爆ぜた。銃弾を放った時のそれとは比べ、幾分耳当たりの良い響きであった。

「ガアアアアアア！！！」

驚きと痛みと顔を歪ませる。妖力は消えては漏れを繰り返し、体は幾重にも凋しぼんでいつている。

「はい、ごころう様」

――それは狸にとって、死神の一言に違いなかった。

急いで振りかえろうと狸が動き出した瞬間に、その体は白いライトエフェクトに包み込まれて現界を終えた。

第1話 内なるもの（後書き）

一応、用語とかは分かるようにしていますが、分からない点があれば本編の用語説明欄をご参照ください。

それでも分からなければ、感想欄にお書き下されば幸いです。

第2話 悪鬼被いへの（前書き）

1話を分割した。

ちよつと長かった気がしたから。

第2話 悪鬼被いへの

「君は……悪鬼被いなのか？」

お姉さんが開口して放った最初の言葉は、こんな自分とは縁の遠い台詞。

「違いますよ。ただトラップって言うクレイ射撃が好きな男子高校生です」

「それはそれで珍しいけど。ねえ、君はいつから『それ』が使えるようになったのかな？」

今度は俺の芯を捉えるようにして見てくる。…嘘付いてないか、調べる様な感じに。

「……今さっきです」

「今さっきい！？ それホント！？」

「最初に使えてたら、わざわざ殺されそうになりませんって……」
確かに、とその女性は疑問符を浮かべながらもそう述べて――

「ん？ ……まあ、それもそうかな？」

そんな自分の言葉に、納得しているかは分からないが、首を縦に振る。

すると今度は自分の右手に投影されている拳銃を、自身の腕から剣を消して”触ろうとしてくる。

「――神魅、ですか？」

「ん？ 今さっきの私の、かな？ そだよー。私の神魅である『干将・莫邪』、聴いた事ない？」

干将・莫邪と言ったら、確か中国に昔あった国、呉の王が創らせた名刀……だったかな？

ああ、駄目だ。小学生の時読んだ『マンガで分かる三国志』程度

の知識じゃ、このぐらいしか分からない。

「少し……なら。呉の王が創らせた、ってところがいしか分かりません」

「うんうん。まあ仕様がなないよね。普通の人ならこんなもんだよ」
そう言ってお姉さんは気障ったらしく人差し指を挙げ、説明し出す。

「干将・莫邪は呉の王が創らせたとは言ってるけど、実は神魃でその剣は創らせたとされる製作者である夫婦のものだったの。簡単に言っちゃえば、呉の王がそれを取っちゃったってこと。干将は陽、莫邪は陰の流れを含んで、実は陰陽術の体系を含む最古の剣、なんて呼ばれちゃってるんだよ」

「へえ……！ それ何か呉王が悪者みたいですね！」

「実際そうだったりするんだよ。実は暴虐の余りを尽くしたなんて言われてるから。……っと、そんなことより」

少々熱の入りすぎた力説を終え、自分の投影された武器に触れる。

——その刹那、とんでもない光を帯びてお姉さんの手を弾き飛ばした。

「つちよ！ お姉さん大丈夫ですか!？」

「あはは、だいじょーぶよこれぐらいなら。…はあやっぱりそうか」
一人納得したように頷くと、自分の方を見据え――

「カッコいい君、これ神魃だよ」

何とまあ、そんな冗談みたいな事を言っ て来たもんだ。

最初は笑って誤魔化す様にしていたが、後からお姉さんの本気さが少しずつ分かってきて、その笑みを消えて行く。

「え？ それ本当です?」

「ホントホント。珍しいね君、そんな歳で目覚めるなんてさらに無いよお。大抵は十歳ぐらいで目覚めるんだけど。……ほら、君の掌何か文様が入ってるでしょ？それは『聖痕』って言って、神魘を初めて投影する時に刻まれる印だよ」

「うへえ。そんなバナナ」

何て寒い冗談が言えるくらい、自分は半信半疑だった。

何しろ自分の家系は、所謂平凡で平然だ。父も母もそういった『被う』専門の家系ではなく、至って平民の出。

こういった被うための力は、その血筋の者が代々受け継いだり目覚めたりするものなのだ。テレビでそう言ってた。

……でも確かに、自分の両手の中には複雑な文様が幾重にも重なっている。

「その顔を見ると、君の家は普通っぽそうだね」

「普通っぽいんじゃないかって、普通なんですよ」

「そっかそっか。それじゃ君は『特例型』ってことだね。通りでそんな武器を投影すると思った」

「と、特例型？」

何だろうそれは。初めて聴いた言葉だ。

「何でもない普通の人が突然力を使えるようになることがあるの。

そう言った人たちの事を特例型って言うのよ！。そしてその特例型の人たちの特徴が——武器よ」

「武器？ 武器に何の特徴があるんです？」

「大抵は神剣とかそーいう昔からある神の加護の大きい武器を投影するのよ。——でもね」

そう言って何かを含んだ顔をするお姉さん。その顔からは先程のお茶らけた雰囲気が消えており、至って昂然^{いっげん}としている。

「特例型の人たちはそうじゃないの。君達が祖となる……っていうの

かな？一切歴史に乗ってないような、そんな稀少^{レア}な武器を投影するのよ」

「って事は、俺のこの武器……」

「ええ、一切見たこと無いわね。それより『拳銃』っていう神魅自体、初めてじゃないかしら」

そのように結論付けたお姉さん。

随時、自分はその投影された分身を見つめる。

淡い燐光を放ち続けている二つの鉄の様な塊は、冷たくもあり――そして暖かくもあった。

「さて、説明も終わったことだし」

そう言ってお姉さんは自分に背を向ける。

「ねえ君。……『悪鬼抜い』になる気はある？」

「……っへ？」

「突然の事で戸惑うのも分かるわ。――でもね、みんながみんなその力を使えないってことは、君も知ってるでしょ？　そしてその君の神魅の使い勝手の良さ。初めてであそこまで扱える器量の良さ。君はハッキリ言って“向いてるよ”」

そう言って少しずつ遠ざかるようにして歩き出す。

「でも君が嫌って言うなら仕様がないかな？　何しろこの仕事は“自身の命を糧にする”仕事なんだもの。……でもね、君がその気なら私は死なない最低限の事を教えてあげる。ちょうど双手武器の使い手同士だしね？　その気があるなら、こっちにおいて」

最後の一言を残し、自分から距離を離していった。

(どうしよつか、俺……)

何しろ、最後の一言。『自分の命を糧にする』という言葉に、自分は少し怖気づいていた。

要するに、下手したら死ぬってことだ。

(——って言っても、あの人がいなかったら、俺死んでたよなあ)

それは自分が力の使い方を知らなかったから、だ。

あの時の恐怖は、今までの人生の中で絶対に一番だったはずだ。それを助けてくれたお姉さん。そんなお姉さんのようになりたい、という気持ちも心の中には有る。

——そういえば、一年間に自分のような目に会って死ぬ人はざつと三ケタを超えると、この前テレビで言っていた気がする。

そんな人々を救うって動機で、この仕事やればいいんじゃないだろうか？

(いや、それにしても動機が少し小さいよね。もうちょっとやる気が起きる様な理由が欲しいなあ)

思案する事、十秒。

そのまま考える事、廿秒。^{じゅうにせう}

いつの間にかお姉さんが怪訝そうな顔でこっちを見ていたが、今は関係ないよそんな光景。動機だ、動機が欲しいぞ。

そして気づく間もなく、俺の脳内では天使と悪魔が口論していた。

——いーじゃねえか。悪鬼ぶつ殺そうぜ。お前殺そうとした

輩だぜ？ ↑悪魔の囁き

—— 待つて！そんな不純な動機じゃ駄目だよ！ もっと考え
て……！ ↑天使の囁き

—— と言つてもよ。実はこの仕事、合法的に銃を撃てるって
ことなんだぜ？ ↑悪魔の助言

（——それだっ！！！！）

「ダッ————シュ！」

急いでお姉さんの方へ駆け抜ける。

「お姉さんお姉さん！ 俺を弟子にしてくれー！ いや大丈夫、絶対損はさせないよ！ うん、そうだよ大丈夫だよ！ 決して動機が合法的に銃が撃てるってことじゃなくて、俺みたいな境遇の人を助けたいからだよ。ああそうだよ！ そんな不純な理由が俺を突き動かしてるんじゃないよ！」

「お、落ち着いて君！ なんか目が暗く輝いているわ！ そして銃を持ったまま走り寄つて来られると、少なからず恐怖を覚えるから止めて！」

「お、お姉さん！ 何とぞ、何とぞ！」

「何がどうなってるの！？ どうして今さっきまで暗そうな顔してたのに、そんなにはっちゃけだしたの！？」

自分がトリップ状態から脱するまで、そこから五分程掛かった。

（——ホント、可笑しな子）

落ち着きを取り戻したその子は、私の開口を待ち望むようにして目を輝かせる。

その彼の顔は大層整っている。目や鼻はスッと通っているし、風によって棚引く髪は、彼の爽快なイメージを朗々と高める。

（“あの子”とは、大違いな感じの子だなあ）

幾分と常人とは比べ顔の厳^{いか}ついなの子。私にとって、目前の子と同じ歳ぐらいな子との交友関係なんて、あの子ぐらいしか居ない。

（でも、……やっぱりあの子の方がカッコいいかなあ）

目の前の子もカッコいいけど、やっぱりあの子も捨てがたい。

——って、自分は何を考えているのだろう。

今はこの子を弟子に取るか取らないか、そこが論点なのである。

（初っ端で神魘を使いこなす……なんてね）

神魘というのは、最初はどうしても暴発するものなのだ。慣れてない神力を投影させたまま維持しておくと言うのは、なかなか難しいことなのである。

しかし目の前の子はそれすら容易く行い、そして微量に神力を操って銃弾を創りだした。さらに二撃目などは、神力を着弾と同時に爆ぜさせるという細かい芸までやったもんだ。

それはもはや初心者域では無い。ちゃんとした『プロの悪鬼拔い』そのものの技量である。

（動機が動機で危なそうだけど……。ま、大丈夫かな？）

決して人に対して力を使うような子には見えないし、もし仮にそうだとしても私が矯正してみせる。

「それじゃ君、本当に良いの？ 死ぬかもしれないんだよ？」

「何言ってるんだお姉さん！ 俺はお姉さんがいなければあそこで死んでたんだよ？ そんな事、もう気になんかしてないよ！」

（心は強い子だね。あんなに怖い出来事に出くわしたっていうのに）

悪鬼を目の前にして殺されそうになる。それは常人であればトラウマものになっても可笑しくは無い。

しかし目の前の子はそれすら弾き飛ばし、悪鬼祓いになろうとする。

「……分かったわ。それじゃ今日から私のことは『師匠』よ。いいわね？」

「分かりました師匠！ 宜しくお願いします！」

口調もちゃんとしないとね、私。これからこの子とは師弟関係。いつものような気の抜けた声色じゃダメ。

「ところで師匠！ 名前は何とおっしゃられますか！」

そう尋ねてきたお弟子君。

しのめあすな

「東雲梓よ。……そう言えば、弟子にもまだ名前を訊いていなかったわね。何て言うのかしら？」

そう私が尋ねると、目を輝かせ、気張ってこう答えてきた。

「俺は要純かなめじゅんいち一です！ 宜しく願いします、師匠！」

第3話 ある修行の一日

師匠と自分が出会ってから、もう3カ月の月日が流れていた。

今居る所は、師匠の実家であり、多くの悪鬼抜いの卵を育て上げる——東雲神道場。

その隣には凄然としている実演場が、枝垂れた桜と共にその厳かな赴きを放っていた。

そんな中、師匠は道場の縁側に座って自分の指導——というより、ある意味体罰を仕込んでいた。

「はい、もう一回」

「つちよ！ 師匠待って……。もうこれで十七回目……」

「待ちませーん。ホラ、さっさと取って来なさい」

「……鬼畜」

「ん？ 何か言ったかしら、弟子の分際で。これはもしかして、修行の内容をもっとグレードアップ——」

「逝ってきます！」

「そうそう、初めからそうしときなさい」

あんのスパルタ鬼怪人。覚えてろよう。

自分はそんな、師匠の東雲梓に聴かれたら八つ裂きの刑になるだろう、おぞましい事を考えながら修行——通称、『地獄の百硬貨』を行っている。

内容は至って簡単だ。

師匠が作りだした鳥型式神——体全身が黒いので、鴉からすのようにしか見えない——に持たせている百円玉を取る。ただそれだけだ。

ただそれだけなのに、自分は何で嘆いているか。それは至って簡潔であった。

式神が百匹いる。

この中から硬貨を持っている一匹を探し出すのは、今の自分では至難であつた。

どうやら神力の流れを読み取るための修行だそうで、その硬貨を持っている一匹は、特別に他のとは異なつた神力を施しているらしい。

しかし口でそうは言つても、やはり体では未だ理解できない。

しかもこの鴉共は猛烈と突ついてきやがつて、尚且つ性質たちの悪い奴は小さな神力を砲撃してくるのだ。

これで苦勞しない奴など居たら、自分は見てみたいと思つていたのだが――

「ほらー、そんなにばーつとしてても分からないわよ？ 私の見込んでた子は、ものの三十秒で取つてきてたんだから、頑張りなさい」

師匠は缶ビールを片手に、このように言つた。

訊くとその子も、俺と同年だと言つてはいないか。

全くすごい奴もいたもんだ、と自分は感慨深く思う。

「いたつ！」

……連携プレイで、式神の一匹の突きが当たってしまった。

これは本格的にどうかしないといけない。

実はと言つと、もう攻略法は分かりきつているのだ。

それは――硬貨を持っている鳥は口が塞がっているので、攻撃を仕掛けてこない所。

自分は襲いかかってくる数羽の鴉を軽くないなすと、その群れの少

ない空間へと躍り出る。

やはり数が数なので、分かったものではない。

（師匠曰く——そいつは“浮いてる”んだよなあ）

1匹だけ存在が異なってるらしい。しかしどのように異なっているのか、そこがよく分からない。

「っと！」

随時飛びかかって来た鴉を、右手の銃からマズルフラッシュ発射光を迸らせて外気へと破散させた。

（どうだったっけ？ 目で見るんじゃないくて、感じれ……だっけ）
とりあえず、目の前の集団のある1匹に、注意して気配を感じることにする。

その間、飛びかかってくる鴉を右手、左手と交互に銃を放ちながら耐え忍ぶ。

（……お、だいぶ分かって来たぞ）

気配——ではなく、神力を感じ取ってみると、それはまるで“創られたような存在”のような力を微量持っていた。

この能力が師匠曰く、悪鬼抜いの業界に於いては必要不可欠な技量であるらしい。

「つつしゃー！」

理解出来たことに嬉しくなった自分は、左手の仰々しい銃に神力を溜めこみ、そして集団の方へと勢い良く放つ。

その集団の中心あたりに銃弾が到達すると、それは爆発するように周囲へと神力の欠片やこばを解き放つ。

これが自分の三カ月の修行の集大成だ。

距離を測って、一旦自分の支配を離れた神力を再び操作して、細

かく分離させる。

これ程の技術は、未だ嘗て見たことが無いと師匠は驚いて言っていたが、別段として難しいイメージは無かった。

距離間を測るのは射撃に於いて普遍的なことだったし、神力の扱いは、何故かと感覚で分かってくるし。

破散弾が炸裂した後は、無残にも式神を形成していた紙が散り散りになっていた。

（ふう、張り切りすぎたか……）

と思つて、もう一回だなと悲しくも割り切っていると、一匹だけ未だ原形をとどめている鴉が。

——その嘴には、目映ゆかしく銀色に輝いている日本国の硬貨が啜えられていた。

「……お？」

うつそ、え？ 本当？ 成功？

急いで師匠の方を振り返ると、空になったビール缶を縁側に置きながら、新たにチューハイを取ろうとしたモーションで固まっていた。

（まだ駄目かあ。……ちよつとこの子には、早かったかしら）

空になったビール缶を憎たらしく覗きながら、私は弟子である要

純一君を眺めていた。

あの鴉の集団の攻撃を軽くないなせるようになったことは、まず称賛したいところだが……。

何時^{いつ}になっても、自分の神力以外に存在する力を把握出来ない。

これはある意味、悪鬼抜いにとっては痛手となる。

危険察知、敵の座標特定、味方の援護の気配。

これらの戦闘に於いて必要な物を感じ取るには、第一に力を読み取る事が重要であった。

（あの子はすぐ出来てたんだけどなあ）

——いや、あの子が“異常”であっただけか。

いくら何でも、あれは行き過ぎていたかもしれない。

この修行を初めてやらせた人で、一分も掛からずに硬貨を取って来たのは彼だけだ。

無論、私もこれをこなすのに一週間も掛かっていた。

あれは最早、天性の才能なのかもしれない。

所謂“前世からの賜物”と見なさないと、あの出来事に合致できる根拠など無い。

弟子は二双の銃から、近くに寄って来ている式神を一つずつ丁寧に落としていつている。

そんな中、目線は一方に集中していて、そのままその一点を探り取るように凝視していた。

（もしかして、気配を察知したのかしら？）

淡い期待を抱いた瞬間——

「いよつしゃー！」

何故か弟子は大声を挙げた。たまにあのような不可解な行動をとるのは、まあしょうがないとしても、なかなかイケメンなだけに勿体ない。

彼はそのまま嬉々とした表情を浮かべると、左手に脳密度な神力を溜めこみ前方に射出した。

それは式神の群れの中心に刹那の時間で辿りつくと、即座に周囲へと細々となって吹き飛んでいく。

あの子がここ三カ月で大成させた神力の扱い。

——それは言ってしまうえば、常人では決して出来ないような繊細なものだった。

一度自身から切り離れた神力を、再び支配下におくのは、決して簡単な事で無い。

尚且つそれを細々に、しかも周囲に距離を測ってなど……。

これは唯一無二の彼のポテンシャル。今後に於いて、弟子を助けて行くであろう天賦だ。

しかし――

（はぁ、やり直しねこれじゃ）

多分、式神一匹の存在を確認ができそれでテンションが上がって……。

この少しお調子者のような所は、矯正しておいた方が良いかもしれない。

缶を口元に持っていくが、今更になって空であった事を確認した私は、クーラーボックスの中に冷やしていたチューハイを取ろう――
とした所で、無意識の内に制動せざるを得なくなっていた。

演習場にポツンと佇む弟子、そして……硬貨を啜えた一匹の式神。

（まさか……、硬貨を持っている式神以外を、全て排除したと言うの？）

それは今の私でさえ出来ない、正に天才の所業と言わざるを得ない程の技術。

今さっきまで、一匹の式神の存在を確認する事しか出来ていなかったのに、そこから全体の式神の存在の把握し、一匹の異端以外をすべて排除……。

（本当に、あの子のように——）

若干畏怖の念を覚えて、こちらに振り返った彼を覗く。

彼は喜んだように私の顔を窺うと、その場に座る。

そして——

「やべー！　すげー！　俺マジで感動した！　いやあ、奇跡ってるんだね！　ちよ、これは今日のブログに——って、師匠！　これって合格ですね！」

本当に残念だった。

「まぐれでしょうが……いいからもう一回やるわよ」

「ええ~~~~~！　そんな！　師匠、それは余りにも暴挙が過ぎます！」

「いいから、ほら。やりなさい」

「うへえ、何時の間にこんなに式神を発動——って！　めっちゃ今さっきより好戦的！？　これどうにか出来ませんか、師匠！」

いずれあの子のように——なれるといいわね……。

第3話 ある修行の一日（後書き）

誤字脱字などないようにしてますが、あつたらごめんなさい！

こつちの話は、一応本筋の方にも繋がっております。

そして純一の雄たけびのこの描写が違うのは、

梓さんの聴き間違え——ということで、決して間違っているわけではありません。

第4話 それは必要な

最近はやつとの事で師匠と手合わせが出来るようになっていた。

——とはいっても、一方的に、なぶ鵬られるだけなんだけどね……。

「ほら、腰が甘いわよ」

「くっそ！」

刹那に梓さんの死角に移動し、銃の柄で首筋を叩きつけようとした――

「気配を消しなさい」

「げふう……」

おおおお。後ろ蹴りが……腹に……鳩尾に。

悶絶しながら、自分はその場へとへたれ込んだ。

「まだまだね。動きは随分と良くなってるけど、その分気配の消し方が荒削り。そして師匠に『くっそ！』とはどういう事かしら？」

「す、すみませんでした……」

「分かれば宜しい。それじゃ次は『レッツ！ 式神バトル』よ」

……な、何だと！？

「ま、待って下さい師匠！ 俺、まだ師匠と手合わせしておきたいです！」

「私の式神をあっさり倒せるようになったら、やってあげてもいいわよ？」

「うぐう……」

これはもう、避けられない運命なのか……。

——“レッツ、式神バトル”。

言い方だけは何とも可愛らしいかもしれないが、内容はおぞましい程にえげつない。

それはただ只管に式神を攻撃して、破壊するだけ。

それだけなのだが……その式神は、悪鬼祓いの中でも一流である師匠が本気で創りだしたもので、正直に言ってしまうば——めちゃくちゃ強いのだ。

（あんな攻撃、避けれる訳ねーじゃん……）

式神の持つ鞭のような武器は、なっつんでそんなに伸びるのっ！
つてぐらい距離が離れていても当たる。

しかも追尾機能付きで、避けても当たり、尚且つ鞭特有の蚯蚓腫れが残らないことや、傷が付かないため、痛みが緩和されることが無いのだ。

それは言ってしまうば——拷問。

痛めつけて回復させてではなくて、傷めつけながらも傷はつけずに元の状態を維持する……という、最早非人道的なものだ。

「さあ、始めるわよ」

どこからともなく取りだしたチューハイを片手に、高密度の神力を御札に宿すと——ソイツは自分を覗きながら、薄ら笑みを浮かべて現界した。

「っしや！」

——先手必勝！

右手のペネトレイター（最近名付けた）に神力を施し、鋭い一撃

を式神へと放つ。

だがその銃弾は、あっさりと鞭のような剣のようなものに弾き飛ばされる。

「ギギギギギギ……」

鈍い声——というより、音に近いものを発しながら、その式神は俺の元へと一瞬で詰め寄ってくる。

（……速い！）

振るって来た鞭型剣を左手のブラスター（これも最近名付けた）で弾く。

目映い火花と共に、とんでもない力の勢いが自分の体を襲った。

「っが……！」

思わず苦悶の声が出てしまったが、未だこれは序の口。痛いなどと言ってられない。

式神はそのまま、反対の手を鞭型剣と誘って追撃してくる。

それは神力を含んだ、右手より射出した銃弾によって回避した。

一旦距離を離し、ブラスターから破散弾を勢いよく発射させる。式神を多い被った幾多もの欠片の刃は、一気に式神を傷つけていった。

（……お？ 今日調子いい？）

——なんて幻想も、束の間だった。

「ギギギ！」

とうとうこの式神の難点、ホーミング鞭が襲いだしてくる。

「っちい！」

これを止めるのには、一応方法があると言えばある。

まずペネトレイターの鋭い一撃で軌道を逸らし、ブラスターの重い一撃で地面へと押しつけてベクトルを無くす。

この方法は何回もやってきて、やっとの事で編み出したのだが…

…。

「っがああ！」

上手く退けた鞭の別方向から、別の奴が空気を切り裂いて自分へと向かって来た。

パシン！ という乾いた音とおもに、激痛を齎す。もたら
「くそ……」

これをどうにかしないと、俺の勝ち目はない。
再び振るわれてくる鞭を掻い潜るようにして、自分は式神の方へと駆けだした。

「いてえー！！！」

かれこれ何回目かも分からない弟子の悲痛な声を聴きながら、私はチューハイをぐいつと喉に流し込む。

あまりこういう趣味は無いが、見てみると、日頃少し生意気な弟子を成敗しているような気分になって、少しだけ心が晴れる。

（まあ、早く気付かないとこの修行は終われないわね……）

その気付かないといけない事は、今後の悪鬼との戦闘に於いて必ずと言って“必要”になってくるはずだ。

なぜならそれが在るかないかで、生存率が変わる。

私自身、それは甚く体感している。子供の時、何でこんな修行し

ているんだろう？　と疑問に思っていたが、このためなんだな、と改めて思わされた。

それだけに、これは決して止めてはいけない修行。

多分これからも、ずっと私自身も含めてやっていくであろう鍛錬だ。

「くっそ……」

苦悶の表情を浮かべながら、弟子は式神と一定の間合いを保っていた。

あの様子だと……まだ気付いていないようだ。

——そろそろ、分かりやすいヒントぐらいあげてもいいかもしれない。

実はと言うと、私もそのヒントでこの修行の重要性を理解した身だ。

「弟子」。言っておくけど“攻撃しないと”この修行、終わらないんだからね」

「わ、分かってま……？」

私の言葉を投げるようにして応えようとする——前に、弟子は一つの答えを導きだそうと頭を捻りだした。

流石は私の弟子。あのヒントだけで分かった門下生は、今のところ2人ぐらいいしか居ない。

（さあ……頑張つてよ）

もう一本チューハイをクーラーボックスから取り出しつつ、おつまみである柿の種を摘まんで弟子の行く末を眺める事にした。

「弟子」。言つとおくけど、“攻撃しないと”この修行、終わらないんだからね」

自分が痛みで意識朦朧としていると、そんな言葉を投げかけてくる師匠。

「わ、分かってま——」

と、ここまで言葉が出掛かったが、すぐに止めることにした。

あの師匠なのだ。そんな普遍的な言葉、何か別の意図が含まれているに違いない。

（攻撃しないと……終わらない）

その言葉は、何故か深く心に刻みつかれた。

（そう言えば……俺）

——ここまで、鞭の攻撃を避ける事しか考えてなかったな。

（……なるほど、そう言う事が師匠）

はつきり言つて、これは酷い事だ。苦痛には耐えなければならぬいし、その所業を誰も止めてはくれない。

——だが、それは当たり前前の事なのだ。

（誰が“悪鬼を止めてくれる”ってんだ）

そう思った瞬間、俺は両手の人差し指を引金へと持っていく。

「ここからは……違ふよ」

その言葉と同時に、煌々として神々しさを兼ね備える銃弾を進らせる。

式神は避けるが、そんな事などお構いなしだ。
避けても撃つ。避けても銃弾を放つ。

ただ攻撃して、相手の現界を終わらそうと奮闘する。

「ギギギギギ」

何時もとは違って、少し悲痛な色が混ざっている声を挙げたかと思うと、二対の鞭を自分の元へと振るってくる。

その二連撃を避けると、自分は即座に両手の拳銃に神力を溜め込む。

「つぐ！」

追尾してきた鞭が、俺の背中に勢い良く叩きつけられる。

受け身もとつて無いため、その一撃はまるで体の内側まで深く貫かれた実感を持たせるぐらいの威力。

——だが、これで良いのだ。

「くたばれ式神い！」

己を叱咤^{しった}するように、こんな一言を叫びながら——

自分はブラスターから、浮動する二つの銃弾を式神の元へと放つ。
そこからペネトレイターで、正に全てを切り裂かんとする一発をお見舞いした。

心地良い発射音と共に、その鋭利な一撃は浮動弾の元へと達する。

——その刹那、全てを屠るようにして、神力が容赦なく周りへと爆ぜた。

「ギイイイイイ！！！」

今まで聴いた事のないような式神の叫び声が、辺りを木霊した。

今の攻撃は、ブラスターとペネトレイターの連携技。

爆発と鋭い一撃を喰らわす事の出来るこの一撃は、多分自分が編み出してきた技の中でも最強クラスだろう。

しかし神力を爆発させるのは、とんでもない繊細な神力の施しをしておきないと出来ない、師匠は言っていたが……。

これも別段として難しい事では無かった。イメージしながら創れば、多分誰でも創れるであろう。

「ふう……」

爆音と少しだけ気持ちの良い神力の波動を感じながら、自分はこの訓練の重要性を初めて重んじていた。

どんな時も容赦はしてならない。これは最初、師匠に教わったことだ。

しかしいくら注意していても、攻撃が掠ったり思わぬ事によって傷つくかもしれない。

この訓練は、正にその内容を想定したものだったのだ。

あの鞭の攻撃は、まず避けて動体視力と体の動きを慣れさせるものの。

——そして思わぬ攻撃が訪れたとしても、“痛みには吞まれない”ためのもの。

人は傷ついたり、痛みが走ると思った以上の行動が出来なくなる。本当はその防衛反応に従って、無茶はしてはいけないのである……。

しかしそれは、悪鬼討伐の時に關しては全く別物となってしまうのだ。

痛みによって動きが鈍くなったり、全く攻撃が出来なくなってしまうと、その後に待っているのは“死”のみ。

これはその可能性をできるだけ低くするための、いわば教訓のような修行だったのだ。

（だったら、最初から教えてくれてても——なんて、そんな都合の良い事はないか）

最初から教わっていれば、自分は何度も痛みを感じることはなかっただろう。

だがそれ以上に、痛みが走ると動けなくなる体のままだったかもしれない。

（……師匠、有難うございます）

何度目か分からない感謝の念を持ちながら、自分はボロボロになった式神の元である御札を拾い上げて、師匠の元へと駆けだす。

そこにはいつも以上の可愛らしい笑みを浮かべた尊敬すべき人が、チューハイ片手に賛辞を送ってくれていた。

第4話 それは必要な（後書き）

誤字脱字などあれば、ご報告を。

師匠……大好きです。

第5話 穏やか？な過ごし

「デートよ」

「……っは？」

「だから、で・え・と。いいから一緒に来なさい」

突然の事で、自分は何が何だか分からなくなっていた。

今、俺の師匠は『デート行くわよ』って言ってたよな……。

——って！ これはどんな夢なんだ！？ あの鬼スバルタの師匠がそんな事を言う訳……。

「来なければ、“レッツ！ 式神バトル♪”でもやらせてあげるけど？」

「逝きます！ 逝かせて下さい！」

手段を選ばないところを見ると、やっぱり何時も通りの師匠であつた。

「それで……どういふ風の吹きまわし何ですか、師匠」

「こおら。今の私は『梓さん』でしょ？」

「……」

あれ？ やっぱり夢か？ とうとう幻想の奥底にでも辿りついてしまったのか？

いや、別に師匠が嫌って訳じゃないけど……。綺麗だし。
でもそういう風に見られないっていうか。
やっぱり師匠とは師弟関係。それ以上でもそれ以下でもないしな。

「今、どうしてこんな事になってるか考えてた？」

「えと……。まあ、そうです」

「大丈夫よ、別に惚れたどうのって話じゃないから。ただ私が一人で歩いていると……。ね？」

「ああ、なるほどです」

何を言わんとしているかは、よく分かった。

師匠ははつきり言って、美人だしよく見れば可愛らしさもある、正に言ってみれば周りから羨望の視線で見られるほどの容姿の持ち主。

俺と一緒に歩いているのは、その容姿にかまけてくるナンパ共を寄せないため……。ということだろう。

なら初めから言って於いても良かったのに……。

「なあに？　もしかして、勘違いでもしてたのかしら？」

非常にニヤニヤしながら、自分の腕に師匠は自身のそれを絡ませ
てくる。

まあ、役得かもしれない。

——だが。

「それは無いです。全然無いですから」

「……貴方とは一回、仲良く会話でもした方がいいのかしら」

ヒイ！　鬼が！　般若が見えるっ！

「ちっち違いますよお！　ああ嬉しいなあ！　役得役得！　キャッ
ホー！」

「まあいいけど」

すぐにそんなどうでも良い反応を見せた事を考慮すると、どうやら最後のアレはからかっていたらしい。

覚えてるよう、と今後の自分の目標を掲げ、師匠に質問する事にした。

「ししょ——じゃなかった、梓さん。最初はどこに行くんですか？」

「ん？ まずはちよつと服を見に行きたいかな」

「了解でつす。それじゃ行きましょうか。……と、その前に、腕どかしてくれませんか？」

「恥ずかしいの？ ねえ、そうなの？」

「歩き難いんですよ。歩幅とか違いますし」

「……他の女の子には、決してそんなこと言わない様にね」

「え？ あ、はい。分かりました」

少し師匠としての部分が、今出てきていたので大人しく従う。

そうして自分と師匠は、デパートへと方や軽い、片や思い足を運ぶのだった。

「お、重いです……ししょ——」

「じゃあないでしょう？ 純一君」

「……鬼エおね」

「ん？ 今、なんだか霧消に殴りたいわね。主に弟子っていう立

場の人を」

「梓さんっ！ 次はどこにお向かいになれますか！？」

「よしよし、次は日用品よ」

どうせそんな事だろうと思っていた。

楽しくデート気分なんて、何でそんな淡い期待を抱いていたんだろっ。

両手には入りきらない程に荷物という荷物が、自分の腕へと吊り下がっていた。

「んじゃ純一君。私ちよつと見てくるから、荷物の見張りお願いね」
「逝つてらっしゃーい」

ふう。やつとの事で休める。

自分は近くにあつたベンチに座ると、両手へと重石のように存在している袋の山を隣へと置いた。

「しかし——こんな日も久しぶりだなあ」

学校行つては師匠の家に行き、休日という休日は全て修行へと回していた。

こんな有意義——と言えるかはどうかは分からないが、余暇らしい余暇の過ごし方は幾分と懐かしくあつた。

「ねえ、その君！ ……今一人？」

「……っへ？ 俺？」

何かと思つて首を挙げると、そこには二人の女子高校生ぐらいの女の子が。

「えっと、一応ツレはいるんだけど」

「えゝ！ でもさあ、今一人じゃん」

「そこで買い物してるんだよ。だから俺は今休憩中」

そう言って両手の荷物を印象づける。

はあ、面倒だ。こうやって自ら寄ってくる奴に、碌な奴は居ないというのは最早分かり切っている事である。

これでどっか行ってくれると助かるんだけど……。

「そんな君ばかりに荷物持たせる様な奴、放っておけばいいじゃない」

やっぱりそう返してきたか。もう放っておいてくれ、と言いたいところだが……ここは我慢だ。

「俺から持つよ、って言ったんだ。だから別に彼女が悪い事をした訳じゃないよ」

「って言っても、普通なら少しぐらい自分で持つつしょ？ その子、絶対性格悪いよねえ」

「あゝ分かる分かる。私なら絶対にそんな事させないもん！」
そう言ってケラケラと笑いだす二人。

この言葉には、思わずカチンと来ちゃったね。

「お前らに、梓さんの何が分かるってんだ……」

「うん？ 何か言った？」

そう質問してきたので、俺は溜めに溜めた怒りを言の葉にのせて応えよう――

と、したところで。

「ごめーん。遅れちゃったー」

何やら聴いた事のないような猫撫で声を出して、師匠がこつちに来た。

「すっごく良い物があったの！ これとかさ、めちゃくちゃ便利そうじゃない——って、この人たち誰？」

何だか嬉しそうに『掃除機で簡単！ 圧縮袋』なる物を見せびらかして、ジト目で女の子たちを睨みだす。

「ちよつと話してただけだよ。それじゃ次はどこに行く？」

「少しお腹減ったから、パフェでもどーかな？」

「OK。……それじゃまたね」

茫然と立ち尽くすように、何やら梓さんの美貌に見蕩れている二人を置き去りにして、自分と師匠はその場を離れるのだった。

「危なかった……。ししょ——じゃなかった、梓さん、有難うございました」

「別に良いのよ。私のために怒ろうとしたんでしょ？」

「まあ……はい」

「それなら気にしないの。ほら、さつさとパフェ食べて帰るわよ」

すっかりといつも通りの昂然とした態度に戻った師匠は、上の階にあるデザート専門店を目指す。

確かに人使いが荒いところもあるが——それ以上に、人の不都合を見逃さず、いかなる時も助けようとする心情を持っている師匠には、いつも感嘆とさせられる。

（ホント、師匠も人が悪いよな。素直じゃないって言うか……）

「ホラ、早く行くわよ……って、どうかした？ そんな嬉しそうな顔をして」

「いえ、梓さんに師事されて、俺は幸せ者なんだなあって改めて実感してました」

「今更気付いたの？」

当然と言わんばかりにふんぞり返って述べてくる師匠の顔は、少し赤みを帯びていた。

照れるのかな？ この人には意外と可愛いところも、あるもんだね。

「今、失礼な事考えてたでしょう？ そんな子にはパフエ無しよ」

「ええ！？ そりゃ無いですよ！」

俺の不満を漏らした声に、師匠はいつも通りの柔らかな頬笑みを浮かべた。

第5話 穏やか？な過ごし（後書き）

本編書くより、こっちの方が書きやすい&好み…w

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8655r/>

双緋の悪鬼抜い

2011年10月5日07時24分発行